

# 朋友おおいた

第4号

発行  
大分教区仏教壮年会連盟  
〒874-0920  
別府市北浜3丁目6-36  
本願寺別府別院内  
TEL 0977-22-0146  
FAX 0977-24-7831



『正』

大分教区教務所長

沙々木 学 海

大分教区仏教壮年会の皆さまには益々ご健勝にてご活躍のことと拝察いたします。

平素より、宗派・教区には格別のご理解ご協力を賜っておりますこと厚く御礼申し上げます。

さて、『般泥洹経』というお経に「身を正し、心を正し、ことばをまことあるものにしなければならぬ」とあります。この「まこと」とある言葉とは、他の人を悲しませ苦しませ傷つけることのない言葉こそ「まこと」ある言葉であり、偽りと、無駄口と、悪口と、二枚舌を離れることであります。仏教では、他の人を悲しませ、傷つけ、苦しめる行いを十ヶあげて、十悪と教えています。その中の四つ目が「偽り」「無駄口」「悪

## 役員紹介

理事

任期：2011.4.1～2014.3.31

組	氏名	所属寺	役職
大海	加藤 武士	専念寺	副理事長
由布院	伊東 俊泰	教法寺	副理事長
速見	平松 幹雄	寶蓮寺	
臼佐	大野 敏秀	福勝寺	理事長
東国東	斎藤 暁	光明寺	
豊後高田	田洪 寿徳	浄周寺	理事長
国東中	有永 俊文	光徳寺	
大野	狭間 利幸	乗蓮寺	副理事長
玖珠	畑山 忠成	専光寺	
日田	高瀬 征生	照蓮寺	副理事長
岡	中城 賢一	光明寺	
耶馬溪	松本 和男	教円寺	副理事長
下毛中	植山 忠夫	長久寺	
中津	白石 耕三	西楽寺	副理事長
深見	選出 中		
院内	三谷 幸助	光蓮寺	副理事長
津房	佐藤 和男	教徳寺	
宇佐	久保 峰康	妙満寺	副理事長

口「二枚舌」の口業です。何れも私たちが得意としていることではないでしょうか。「まことある」とは、どれだけ聞く人、相手の身になれるかという問題です。自分自身に当てはめ、今一度考えてみたいものです。

合掌



仏壮の輪

大分教区仏教壮年会連盟理事長

有 永 俊 文

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がご満座を迎え「新たな宗門の始まりを期する」ということがお聞かせていただきました。

私達、仏教壮年も今後の活動を含め、今一度「お念仏に生きる」ということについて、思いを巡らしてみてもどうでしょうか。

私達をとりまく自然環境や社会環境が不安定になることにより、予想をはるかに超えた災いが私達にふりかかってきた様に思われます。その為に人々は傷つき、心の悩みや苦しみなど多くの問題をかかえてきたのも事実ではないで

でしょうか。

この混迷する社会の中で、私達は聞法の集団として、「心豊かに生きる社会の実現」をめざし活動するというのがさらに重要になった様に思われます。

私達、お聴聞する者同士が、互いに支え合う仲間として、一人より二人、二人より三人と、仲間が増えることにより共有できる心の安穩も得られると共に「絆」という結びつきも強固なものとなるのではないのでしょうか。

その為にもお寺と門徒が一体となつて、これからの仏壮活動に励み未来を担う子ども達へと受け継ぐことが、私達の使命でもあり大事なことだと思えます。

「楽しくなければ仏壮ではない」という思いで、これからお寺と共に朋友や仲間の輪を拡げてまいります。

合掌

# 活動報告

## 由布院組の現状と今後のとりくみについて

— 大分教区・由布院組 —

由布院組 仏壯担当

葦胤 徹 應

ありのままを紹介し、これからの取りくみを考えていきたいと思います。

『朋友おおいた』と名称変更されて、二〇〇九(平成十九)年九月一日(第一号)が発行された。これは仏壯が連盟化(平成十八年)されたことによるものです。今回で第四号の発行となります。掲載コーナーは、各組からの情報交換の場としての限られた紙面とされています。

先般、事務局より執筆の依頼があり浅学非才な者となりながら、思い切つて執筆させて頂きました。当組においては、昭和六十一年十一月九日に組連盟が各寺の単位会より先に出来、徐々に単位会が発足した流れの経緯があります。当初は活動もかなりの盛況でありました。が段々と下火と化してまいりました。その要因は沢山考えられます。ところで、二〇〇〇(平成十二)年五月二十九日発行の大分教区『仏壯だより』に掲載の平成八年二月のアンケート調査が物語っているように、

- A 「仏壯活動の魅力とは」についての質問に対し、
- ① 人間の生き方を深く考えるようになった。
- ② 人間としての尊さを考えるようになった。
- ③ 交流の場が多くなった。
- B 「仏壯活動に期待するものは」について質問に対し、
- ① まことの教えを次の世代に引き継ぎ広めて行きたい。
- ② 聴聞の機会が増えれば、考え方が成長変化し、み教えの本願(他力)を信ずる

ことができるかと考えている。―等々―  
 これからの教区の新たな実現への挑戦と  
 思います。だからと言って教区内そして我  
 が組においても全く実施していかないと言  
 うことでもありません。ご承知のように少  
 寺院の中でこの課題を維持活性化して行く  
 ことは、色々な壁にぶつかり思うような成  
 果が出て来ないのが現状であります。だか  
 らと言って全く行動に移されていない訳で  
 はなく、形としては現れていないのです。  
 年間の各寺の法座、その他の催しには、少  
 数ながら壮年の皆様のご協力があつてそ  
 の寺の運営がなされている事は、どの寺も  
 同様だと思います。これまでの色々な調査、  
 アンケートや研修会での講師のお話しを  
 頂く中で十分その大切さを感じています。  
 さて、組において、この壁を乗り越える  
 ための方策として、原点にかえり、単位会  
 組織強化のため、あすの由布院組仏壯会  
 結成を考へる会、を発足し各寺より住職、  
 坊主、総代、仏婦、各一名を推進員と定め  
 て話し合いの場を設け①目標②事業計画③  
 研修④その他等について考えたいと思いま  
 す。案として、初回は秋季彼岸会後に開催  
 し、その後は随時開催、各寺意見交換し壯  
 年の生き方についてご意見を頂き考えてま  
 いりたいと思います。実施の困難が予測さ  
 れますが組長のご意見を頂き進めてまいり  
 たいと思ひます。組におけるこれまでの単  
 位会の盛会を参考に「朋友の輪」を廣  
 げることがこれからの組として大きな課題  
 と思ひます。  
 組として、キッズサンガの積極的な行動  
 を起し、新たな始まりとして考えて行か  
 なければと思ひます。と同様に各家庭が出  
 発点であることを考えてみましょう。  
 昔のことばに、『鮭は川で生まれ海に  
 下る。そして産卵の時期には生まれたふる  
 りの川にもどる』といわれています。この  
 ことばのように、生まれて育つ段階で手を  
 合わせる生活が、目に映つていけば、いつ  
 かは、ふる里で育てられた思い出が湧いて  
 来て自ずと手を合わせる心豊かに生きる一  
 人の人として、そして、自分をとりまく多  
 くの人々と仲良く朋友の輪を広げ生き抜く  
 ことが出来るものと確信します。仏壯活  
 化はすでに子どもの時に始められていると  
 考えられます。何事も初心にかえりその大  
 切さを知ることが必要と思ひます。

## 親鸞聖人七百五十回大遠忌法要記念 「第二十回全国仏教壮年大会」報告



各教区(特区)の連盟旗が一堂に会しました

昨年九月三日(土)、全国から約  
 千六百名の参加者が御影堂に結集  
 し、スローガン「世のなか安穩な  
 れ 仏法ひろまれ」、テーマ「親  
 友の輪を上げよう」のもと、「親  
 鸞聖人七百五十回大遠忌法要記念  
 第二十回全国仏教壮年大会」が開  
 催されました。大分教区から参加  
 の三十二名は、当日、各駅からソニッ  
 ク号に乗り込み、新幹線で早めの  
 昼食のお弁当をいただき、台風接  
 近の中ご本山に到着しました。多  
 くのイスが並べられた御影堂で、ス  
 タッフとして前日からご本山にいた  
 有永理事長の出迎えを受け午後一  
 時、大会が始まりました。

医師で作家の鎌田實氏が「困  
 難な時代をどう生きるか―」が

ばらない」けど「あきらめない」  
 」と題し、同氏が行っている地  
 域医療や被災地でのボランティア  
 活動にふれつつ記念講演。その  
 後、ご門主ご臨席のもと式典が行  
 われました。そして閉会式で「東  
 日本大震災での被災地の復興に向  
 けた継続的な支援活動と仏教壮年  
 としてお念仏のよろこびを広く伝  
 え、心豊かに生きることのできる  
 社会の実現をめざす」ことが宣言  
 され、盛会のうちに大会が終了し  
 ました。  
 大分からの参加者は、雄琴温泉  
 に一泊し、四日(日)は、神戸の中華  
 街などを観光し、同夜それぞれが  
 乗車の各駅で下車し家路へつきま  
 した。



鎌田實氏による記念講演

法 話

「悪人正機」



中津組照雲寺 住職  
本願寺派布教使

松 嶋 智 謙

浄土真宗のご法義の中に「悪人正機」という言葉があります。平たく簡単に言えば「阿弥陀様の救いのお目当ては悪人」という意味なのですが、時としてこの言葉を聞かれた人の中には、「悪い事をした人ほど救われる」とか「あんな極悪人でも救われる教え」と誤解する人も居られるようです。

先日テレビを見ておりました、政治関連の番組でありましたが、コメンテーター同士が激しく言い争っている光景に出くわしました。出演者は皆さん、所謂「偉い」とか「賢い」と言われる肩書きの持ち主の方ばかりでありましたが、その言い争っている姿からは、

とても「偉い」とか「賢い」という形容詞は思い浮かびそうにはありませんでした。兎に角、自分の方が正しいと口を尖らせ、他人の発言中も平気で遮り、お互いが持論をグイグイと押しつけ合うばかりで、見ている私には各々が何を仰りたいのか全く解らない状態になっていましたから。

『歎異抄』に遺される親鸞聖人の御言葉に「さるべき強縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」というものがあります。「縁に依っては何をすでるか判らないのが私である」ということ。先の言い争いにしても、言い争いで終わっている間は可愛いものですが、一度お互いが自分の正義を振

りかざして暴力に訴え出すと恐ろしい結果となってしまうでしょう。行動が異なっていたとしても、「自分こそが正しい、相手が間違っているのだ」という心根は同じです。そうした心根を抱えているのが私の正体なのです。自分を「賢者」と思って憚らない人ほど、こうした心根は自分には無いものだと思いますのです。そして、そうした思い込みは、仏法を聞く御縁の中では邪魔にしかありません。器がどれほど大きかろうと、そこに蓋をしていたのでは一滴の露も器に入ることはありません。

親鸞聖人は、師匠法然聖人から「愚者になつて往生せよ」との仰せを頂戴しました。そして自ら「愚者」となりて御教えを聞いて行かれました。「愚者」なればこそ、「それはもう知っている」とか「そんなことあるわけがない」等と蓋をすることなく、聞かえて来るままを素直に聞くことが出来ます。阿弥陀様の御救いの御苦勞を聞く中に、その煩惱の心根の深さ故に諸仏方に見捨てられ、阿弥陀様だけしか救うことが出来なかった「私」の事も知らされていきます。「さ

るべき強縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という私を知らされている者であれば、こうしたあさましい心のままに行動することも、自然と控える様になるでしょう。

阿弥陀様は決して私の煩惱の心根を誉めたわけではありません。泣いてくださったのです。どうにもならない病を抱えた我が子(正機)と見そなわし、「この私しか救ってやることは出来ない」と累々の涙の中に「我に任せよ」と喚んでくださったのです。

このお救いの御苦勞を「愚者」となつて聞き受ける者を「悪人」、自分が「賢者」だと驕りながら御法義を聞こうとしない者を「善人」と知るとき、「悪人正機」の正しい意味も自ずと領いていける筈です。



報 告

2011年度仏教壮年連盟  
「中央研修会に参加して」

白佐組真宗寺

森 崎 俊 範

京都駅前の大通りを歩き来する車には10cmほどの雪をかぶって走っていました。

本年度の仏教壮年連盟主催の幹部研修会は、中央研修会と呼称を改め、ものすごく寒い平成24年2月18日(土)19日(日)全国から54名参加し本願寺聞法会館で開催されました。

大分教区からは大野組安藤睦昭さんと2名。

12時30分から開会式後、さつそく①浄土真宗の教義、②仏教壮年会の基幹運動の講義があり、その後16時から19時まで6班に分かれて、各々の寺、仏教壮年会の様子など話し合いが始まりました。私の班の9名は30代の仏青OBの方や60〜70才でも「壮年会活動は初めて」と話された人も何名かおられました。

京都は寒いと聞いておりました。が、2日目朝6時からの阿弥陀堂のお晨朝は寒いこと寒いこと。

午前8時45分から11時45分まで各

班担当講師がパネリストとなって班会議の報告がありましたが大分教区と似たような状況であることが解りました。まとめに中央推進員の中山さんが「皆さんが頑張っていて欲しい」旨あり、「質問は？」と聞かれたので「我々仏社会員の研修も大事だが法中方の指導が先じゃなからうか？」と聞きました。「その通りですが指導が行き届かんのです。」との話が心に残りました。



仏教壮年会連盟綱領

われわれ仏教壮年は、  
自らの生き方を親鸞聖人のみ教えに聞き、  
ともにお念仏申す朋友の輪を拡げ、  
心豊かに生きる社会の実現をめざします。

2012(平成24)年度大分教区仏壯連盟総会結集大会報告

2012年6月2日(土)仏社会員197名の参加をいただき、盛会のうちに総会、結集大会をおこないました。

開会式ではお勤めのあと、教務所長、理事長に挨拶をいただき、平成23年度の活動報告、決算及び平成24年度の活動計画、予算等の審議で可決をいただきました。意見発表では、東国東組、由布院組、豊後高田組の代表から日頃の活動状況が詳しく発表されました。護寺発展のため、各仏社会員が日々努力されていることを思い知らされました。

また午後からは、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ(龍馬止宿を記す日本人物詩を公開して)」と題して大分教区大海組徳應寺住職、本願寺派司教の東光爾英先生による講話をいただきました。仏教と龍馬の歴史等を客観的な捉え方で話され、私にとつて今後の人生の指針となる経験をさせていただき、この先皆さん

と共に寺を守っていかねければならないと改めて感じた今大会となりました。

大分教区仏教壮年会連盟 副理事長

加藤 武士

あとがき

梅雨とはいえ、大分県にとんでもない量の雨が降りました。私たちの故郷の御同朋の皆様方には多大な被害にあわれた方が多数おられると伝え聞いています。

早くも、あの豪雨より二ヶ月が経ちました。自然の猛威に対して人々は何と無力なのかと去年・今年と思ひ知らされました。しかし明日を信じ、多くの人々に支えられて立ち直るしかありません。一日も早く安堵できる日々が来ます様にお祈り致します。

例の三兄弟に一才九ヶ月の弟も三ヶ月前から仲間入りすることになりました。毎週二日くらいの割合で、夜、仏壇の前でおつとめをします。阿弥陀さまへ一日のお礼と感謝の言葉、最後に恩徳讃を唱えます。

私と孫四兄弟で唱えるのですが、一才九ヶ月の孫が最初から最後まで一番真面目に唱えます。勿論、何と言っているか分かりません。きくと、のの様には通じているのでしょうか。最後に皆で合掌「のの様、阿弥陀様、お父さん、お母さん、お休みなさい。なんまんだぶ、なんまんだぶ、なんまんだぶ」...それから四人で手分けをし、お灯りを消して仏壇のお花をさげて扉を閉めます。

そんな姿を目の前で見ていると、知らず知らずと目尻が緩み微笑みがこぼれます。暑い毎日が続く今日この頃です。皆様もお身体に気をつけ日々をお過ごし下さい。

合掌

編集委員長 平松 幹 雄  
副理事長

